

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	訪問看護と在宅医の連携 ～24 時間の訪問体制を通して、一年間の実績報告～
演者名	森元陽子 1) 田村陽一 2)
所属	みんなの訪問看護リハビリステーション 1) ゆう在宅クリニック 2)

目的

団塊の世代が後期高齢者を迎える所謂 2025 年問題まで約 10 年となった。介護・医療を必要とする人口は爆発的に増加する事が見込まれており、訪問看護の必要性がますます高まっていくことは容易に想像できる。当ステーションは機能強化型訪問看護管理療養費 I の算定要件も満たしており、20 名以上の看護師が在籍する大規模型の訪問看護ステーションである。開設から 4 年目を迎えた現在では約 400 名の利用者の療養生活を支援しており、地域での果たす役割や責任は大きい。利用者の療養生活支援のためには往診医との連携が欠かせない事は言うまでもないが、緊急時対応に関しては在宅医が対応するのか看護師が対応するのか判断が難しいケースが存在する事も事実である。平成 25 年 9 月から 26 年 8 月までの 1 年間に 665 件の緊急対応を行ってきた。1 年間のデータをもとに、在宅医との関係性及び訪問看護の果たすべき役割を明らかにしたい。

実践内容

平成 25 年 9 月から 26 年 8 月までの 1 年間の緊急時対応から、在宅医との関係性及び訪問看護師の役割を考察する。

実践効果

緊急連絡の総件数 665 件

電話のみの対応 267 件

看護師のみで緊急訪問 352 件

在宅医に指示内容の確認 28 件

死後処置 18 件

考察

一年間の緊急連絡は 665 件で、電話のみで対応できたケースは 267 件、看護師のみで訪問したケースは 352 件であった。状態変化が予測されるケースに対してはあらかじめ利用者・家族に対応方法を指導したり、定期的に在宅医とのカンファレンスを実施していることで在宅医から予測指示を受ける体制を整えており、看護師の判断で対応できたケースが大半を占めたことが示唆される。大規模ステーションのメリットを生かしてすぐに動ける看護師を配置したことや、IT 端末を利用して看護師間の情報共有を図ってきたことで数多くの依頼に対応できたと思われる。訪問看護の必要性がますます高まる事が予測される時代に対応するため、24 時間対応の安定的な継続に努めていきたい。